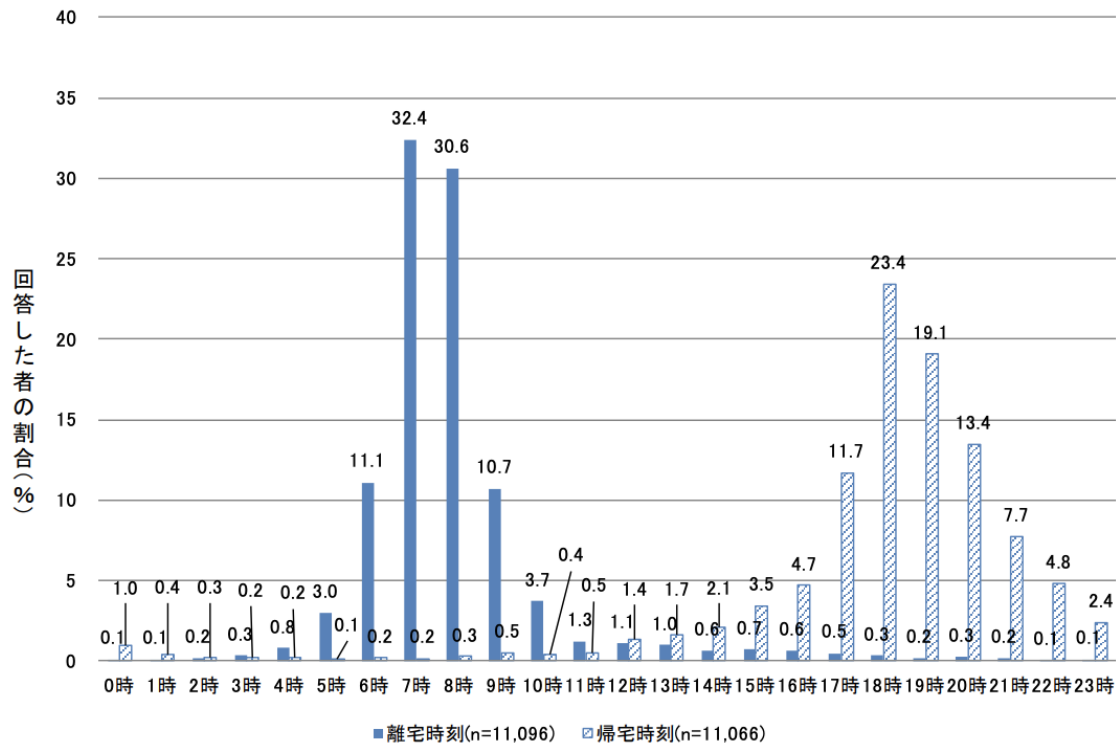


仕事に出る離宅時刻と仕事からの帰宅時刻が示唆する テクノロジーを活用した会話の増加の必要性



出所: 国立社会保障・人口問題研究所(2017)「生活と支え合いに関する調査」p.39
<http://www.ipss.go.jp/ss-seikatsu/j/2017/seikatsu2017summary.pdf>

2017年7月に国立社会保障・人口問題研究所が実施した「生活と支え合いに関する調査」によると、働いている者について仕事に出る離宅時刻と仕事から帰る帰宅時刻を調べた結果、上図のように、離宅時刻は6時台から9時台が計85%、帰宅時刻は17時台から20時台が計68%で、それぞれ大半を占めている。

帰宅時刻と離宅時刻の差分として離宅時間を算出すると、最多は11時間(18%)、次いで12時間(16%)、10時間(15%)、13時間(11%)、15時間以上(7%)の順となった。

仕事のために自宅から離れている時間と「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分取れない」かどうかの関係については、働いている者の32%が、仕事で原因で家族と一緒に過ごす時間が十分取れていないと回答した。

子どもの有無を踏まえた「離宅時間と仕事で原因で家族と一緒に過ごす時間が十分取れないでいるか」ということについて「あてはまる」「まああてはまる」と回答した者の割合を観察してみると、仕事で離宅している時間が8時間までは子どもの有無で大きな差はないが、9時間を超えると「あてはまる」「まああてはまる」と回答した者の割合に差が開き始め、15時間以上のところで子どものある者は71.4%、子どもの無い者は57.7%と最大だった。

概ね家を12時間以上あけると、「仕事が原因で家族と一緒に過ごす時間が十分取れない」という結果が増加することがわかった。個々人が働き方を改革していくことによって、これらの比率は変わるかもしれないが、居住環境や通勤時間などを考慮すると、ほとんど全ての業種でリモートワークが実現しない限りは抜本的な改善は期待できないだろう。

しかし、これではますます本来は子どもが育つはずの保育園を利用する際の保護者の罪悪感が増す一因になりかねない。このような課題をテクノロジーで解決できないだろうか。つまり、家族との時間という量的側面ではなく、家族と過ごす内容という質的な部分で貢献できないだろうか。

保育ロボット『VEVO』は、子どもに楽しみを提供したり、保護者に必要な情報を提供したり、保育士の事務作業を減らしたりと、保育現場での様々な場面を支える先進技術である。VEVOが計測した登降園時刻をもとに、園児ごとに在園時間と延長保育料を自動で算出したり、園児の在園状況から最適な保育士のシフト管理をしたりもできる。これは、保育士の負担の軽減につながる。これまでは、保育士が5分毎に午睡中の子どもの様子を確認しながら紙に記録していた作業を、午睡中の園児の衣類に付けたセンサーが寝返りや呼吸を常時計測してVEVOに送信し、異常時は警報音で知らせる。また、降園時には、VEVOから保護者と子どもへ収集した情報を伝達する機能を持つ。この機能によって、VEVOを設置した保育園では、保育士と保護者とのコミュニケーション量が増加することがわかっている。VEVOが登降園時に今までになかった情報を提供することで、子どもにまつわる新たな会話が保護者子ども間、保護者保育士間で生じたり、VEVOが子どもに対して話しかけている間に保護者と保育士との会話量そのものが増えたりするからだ。

社会構造の変化によって限られてきた家族と過ごす時間を、有意義な時間にできるような役割を果たしていけるよう企業努力が欠かせない。

●当レポートは、信頼できると思われる各種データに基づいて作成されていますが、当社はその正確性、完全性を保証するものではありません。当レポートのご利用に際しては、ご自身の判断にてお願い申し上げます。また、当レポートは執筆者の見解に基づき作成されたものであり、当社の統一した見解を示すものではありません。なお、当レポートに記載された内容は予告なしに変更されることもあります。当レポートは著作物であり、著作権法に基づき保護されています。当レポートの全文又は一部を著作権法の定める範囲を超えて無断で複製、翻訳、翻案、出版、販売、貸与、転載することを禁じます。